ウィンドーディスプレイにおける表現手法の考察

――大型の仮設プロダクトにおける実証――

*桂　　雅　　彦

Study on the Method of Expression for Window Display

KATSURA　Masahiko

要　旨

本研究では、バロックというテーマに則ってデザインした横6m高さ3mの大型ウィンドーに設置する立体物で構成された絵を表現するべく、質感が石膏でできているようなアンティーク調レリーフのある額縁を設置することにした。それがメインの表現になる為、それを実現させる為に様々な観点から素材と手法を研究した。また、構成させる様々なオブジェも新たな表現になるように既存の素材をイメージに合わせて工夫しながら使用した内容に関する考察である。

Key words：ウィンドーディスプレイ・クリスマス・バロック・大型額縁・オリジナルオブジェ

1. はじめに

本研究は、産学連携事業である artroom におけるウィンドーディスプレイに関係する制作の表現手法においての考察を述べるものである。テーマがバロックということで、従来の子ども向けのクリスマスのイメージを一新し、大人のクリスマスであり、伝統的なヨーロッパスタイルをベースに考えることとなった。様々な角度からデザインコンセプトを立案し、横６ｍ高さ３ｍ奥行き３ｍで途中に防火シャッター扉の設置不可の領域がある決して自由にディスプレイできるものではなく、搬入等の諸条件をクリアしたデザインを実施することができた。

2. バロックというテーマ

バロックは、ポルトガル語の barroco（ゆがんだ真珠）からの語源で、16 世紀末から 18 世紀にヨーロッパで流行した芸術様式である。語源からも言えるように均整と調整のとれたルネサンス様式に対して、自由な感動表現、動的で量感溢れる装飾形式が特徴になっている。「永遠の相のもと」がルネサンスの理想であり、「移ろい行く相のもと」がバロックの理想で、すべてが虚無であるとする「ヴェニタス」、その中で常に死を思う「メメント・モリ」、そうであるからこそ現在を生きよとする「カンペ・ディエム」という破壊と変容の時代がもたらした３つの主題が多く見いだされる。

3. デザインコンセプトについて

自由な感動表現でいて、動的で量感溢れる退廃的ニュアンスをクリスマスに応用することが基本になったのだが、楽しいクリスマスを暗いものにすることではない。あくまでも子ども向けのライトな感覚ではなく、大人が楽しめる重厚感のある表現が必要だと感じた。

貴族的であり、決して安っぽくない感覚で、遊び心もある。そのような観点から、一つのイメージとしてイタリアの伝統的な仮装の祭りであるヴェネツィアのカルネバーレを想起した。カルネバーレはイタリア語のカーニバルの意味だが、決して子ども向けのお祭りではなく、ヨーロッパ各地から貴族が集まって中世の衣装に身を包み、マスケラ（仮面）を付けて時代を超越した雰囲気を楽しむ豪華な遊びの世界なのである。

＊　宮城教育大学美術教育講座

これは、まさにバロックであり大人の遊びを伝統的に行っているイタリア独自の美意識に則って成立している。これを見事に映像化している奈良原一高氏の「ヴェネチアの光」を参考に考えた。

ここにあるのは、「男と女」そして「遊び」の美学である。当然「愛」が存在し、そのシーンが一つの絵になって魅了する。毒々しくなく貴族的で深遠な美の世界である。そんな人を魅了する神聖な感覚で贈り物をするのが本来のクリスマスではないだろうか。それを一つのイメージコンセプトとして想定し、具体的に構築して行った。「バロック的愛のある贈り物の世界」である。それを端的に表現した文言としてあえてイタリア語で「Regalo con Amore」（愛を込めた贈り物）にした。これに則って、デザイン案を具現化することにした。

4. ウィンドーデザイン案

上記で示したコンセプトに基づいて、進め方としては、言葉だけで追っていてもイメージがなかなかうまく創出されないので、ヨーロッパのインテリア系雑誌のバックナンバーを参考にしながら、ビジュアルとしてヒントになるものを収集することからはじめた。特に、ELLE DECORATION,VOURE DECORATION 等を中心にバロック的な雰囲気と大人のクリスマスに応用できそうなデザインソースを抽出することにした。

様々な資料を収集し、ウィンドーデザイン案を進めて行った。集めた資料の中にデコラティブなバロックのイメージに近い石膏でできているレリーフの美しい額縁があった。この参考の写真には、石膏風の様々なオブジェが額縁内に構成され、独特の表現になっている。立体物でコラージュされた一つの絵である。

図01　デザインの参考資料となった雑誌の写真

このように、バロック調のレリーフに大胆で動きがあり、優雅な貴族的雰囲気を醸し出しているもので、石膏のホワイトマットの抑制された美しさが生きている。さらに立体物で構成された絵として角度を変化させて眺めると違った調子になり、ライティング効果などが楽しめるものとなる。

このイメージの額縁をウィンドー全面に収まるようにする場合に制作上の問題等が想定されるが、アイデア段階では可能であるという判断で進めることにした。実際に、絵をどうするかが重要になる。ポイントとしては、クリスマスのイメージをまず創出させること、そして、テーマである贈り物をインパクトある形で表現することができるかである。デザイン案に関しては、学生にも協力してもらい基本的にインテリア系のデザイン誌からの参考写真をコラージュする感覚で作成した。第一弾のデザイン案は以下に示すようになった。

図02　最初のデザイン提案

これは、クリスマスのイメージを中央にボリューム感のあるトナカイの頭蓋骨のオブジェを配置し、その全面に部屋を感じさせるように上部からシャンデリア、右端から大きな指輪、左にテーブルを設置し、その上により神聖な感覚の儀式をイメージさせてエンジェルを浮かせた。額縁は、あくまでも石膏風にしたいので、マットホワイトになり、それに対して絵の部分は煌びやかで華やかなバロックのクリスマスを表現する為、ゴールドを基調にした表面仕上げを基本にした。ただし、テーブルはアンティーク調であるがゴールドや背景の花を対比させる為にあえてブルーグリーンの配色にした。背景は、ゴールドが映えることと、華やかさをより演出する為に微妙に変化するレッドパープル系の花びらを敷き詰めた立体感のある面にした。

その他のデザイン案も提示したが、最終的にこの案

の方向性で進んだので他のデザインに関しの説明はここでは割愛する。

デザインコンセプトとデザイン案のスケッチ段階では、この方向で進むことになったが、縮小模型を作成してプレゼンテーションを再度行うこととなった。以下の写真がプレゼした模型と額縁の実材における試作品である。

図03　プレゼに使用したディスプレイの模型

図04　額縁の使用素材と表面仕上げのサンプル

縮小模型は、実際にウィンドーに設置した時にどのように見えるか、問題点があるか、視覚的なデザインチェックだけでなく、施行上の問題点等も模型を制作すると見えてくるものがある。特に、絵としてのボリューム感というか訴求力がやや足りない感じがし、中央部にあるトナカイの頭蓋骨のオブジェに関しては、より迫力のある表現をすることと、制作上かなり大変な作業になるが、平面的な表現ではなく、ある程度可能な限り立体感やテクスチャーのあるように工夫すべきであると感じた。

5. 額縁の制作方法

図 04 にあるように、最終プレゼで実材による試作品を提示した。ペーパー上では何とでも表現できるが、実際に具現化できるかどうかが重要である。特に、今回のディスプレイの場合、この石膏風仕上げによるバロック調のレリーフを施した額縁が重要なポイントを占める。当初は、実際に石膏を使用する考え方で進めたが、横６ｍ高さ３ｍのウィンドー内に内接するような大きさを想定しているのでかなりのボリュームになる。それを表面的であってもレリーフ部分に特定化しても石膏で表現するのは重量的なことや構造、制作上かなり問題があるのが分かった。基本的に本体は発泡材で構成するのが良いと考えていたが、石膏風の仕上げとレリーフをいかに美しく表現できるかがポイントになった。次に、そのレリーフをどのような表現できるかを様々な素材で研究した。粘土系でも石粉粘土で表現して、その上にジェッソを塗る方法で試作してみた。以下がその試作品である。

図05　石粉粘土をレリーフ部に使用した試作品

この試作品に関しては、ベースになっている発泡材とのマッチングが良くなく、剥離する可能性が高いことと、破損とクラックが思ったよりひどく発生することが分かった。さらに、重量が予想よりも大きくなり、構造上の問題が大きくなる可能性があると判断した。図 04 の試作品に最終的に至った考え方は、白くきめ細かい発泡材を使用することとジェッソに石膏を混ぜることによって石膏風仕上げを実現させることができるという判断とレリーフ部分も発泡材で表現して

それに同じ石膏を混ぜたジェッソを使用することで近似的なものを実現することができるということになった。そのジェッソも、粒子の一番粗い石膏に近いイメージに合うものを使用することでより良い効果が出ると判断した。さらに、発泡材だけで構成することにより、重量的な問題はなくなり、木枠の構造材を背面に設置し、それに装着する考え方で一定期間の展示には耐えうると考えた。ただし、問題が一つあった。この白いきめの細かい発泡材は一般的なスタイロフォームに比べて価格が高く、当初、画材屋から試作の為に購入した金額で構成するすることは予算上無理であった。この素材は、カネライトフォームスーパー E- Ⅲで JIS A 9511 A 種　押出法ポリスチレンフォーム保温板３種ｂという通常建築の断熱材として使用されているもので、粒子が細かいので加工性が良く、モデル材として画材屋が調達していたと考えられる。幸いにもネットで調べた結果、画材屋の価格よりも９分の１で調達することが可能になった。ただし、震災復興の関係で建築資材が不足していて制作可能な納期に間に合うかどうかが次のポイントになった。また、額縁だけでなく、メインのオブジェとしてトナカイの頭蓋骨をできるだけ立体的に表現しなければならない。これにもこの発泡材を使用することになったので結局、厚さ 100 ミリの三六判を 17 枚も要することとなった。

６. 最終的なデザイン

基本的な表現方法や予算上の問題がクリアされ、実現に向けて最終的なデザインの試行錯誤を行った。石膏風仕上げの大きな額縁にメインのオブジェとしてクリスマスを象徴するボリュームアップしたトナカイの頭蓋骨を入れることにした。かなり視覚的な注目度をアップさせるため、単純な金彩では難しいと判断。角の部分をゴールドでの表現にする予定だが、その具体的な表面仕上げをどうするかがポイントになった。後でトナカイのオブジェ制作で詳細は述べるが、発泡材のベースにアルミホイルを巻いてその上にゴールドのスプレーで金属感のある仕上げにし、ゴールドのラインストーンの小さなチップで味付けをすることにした。また、頭部はよりアイキャッチを高める為に透明の光り輝くラインストーンを表面に埋め込むことを考えた。また、指輪、エンジェルとハートのオブジェの他、クリスマスカードを配置することによりコンセプトをより明快に伝えるように考えた。

以下が最終的なデザインである。

図06　ウィンドーディスプレイ最終デザイン

７. 施工図面

現実的に施工を考える場合、搬入がきちんとできること、施工後に数ヶ月の間その表現を維持できる構造であることである。このウィンドーは横からスライドして入れなければならないので、厚みの大きいものは設置できない。長さも分割してウィンドー内で組み立てる考え方が必要になり、一番大きい、額縁は４分割程度で構成することにした。２ヶ月以上の設置に耐える為の構造を額縁に与える為に、発泡剤を使用した本体を支える構造としての木組みが必要になる。巾 450 ㎜の額縁巾に対してしっかりした木材で指示する為に 200㎜巾の材が必要と思われた。できるだけ軽く、しっかりしたものを作らなければならない。厚みを 15㎜とし、合わせ部を金属でしっかりしたものを使用する。床面には下駄を履かせるようにし、天井からも釣るようにするようヒートンを付けることにした。発泡材には強力な専用の両面テープを使用した上で木ネジを使用し、しっかり固定すれば大丈夫だと判断した。これらの制作と仕様に関しては、技術教育講座の安孫子教授と阿部技術職員の協力なくしては実現できなかった。

また、次に大きいトナカイであるが、これも背面のパネルを利用できないので、自立するように角部と頭部に３分割して制作することにした。さらに、予算上の問題もあり、発泡材のパネルをできるだけ有効的に使用する必要性があり、三六判の取り寸法を無駄がないようにぎりぎりまで使用する考え方のトナカイの表現になった。これは、パソコン上で元あるトナカイ図を拡大縮小を繰り返し、不自然にならない程度に変形させた。

その他のオブジェに関しては、全体の空間のバランスを考えて大きさをある程度想定した。制作上の問題やコストの関係で多少変化する可能性があることで進めることにした。

以下が基本的な施工図である。

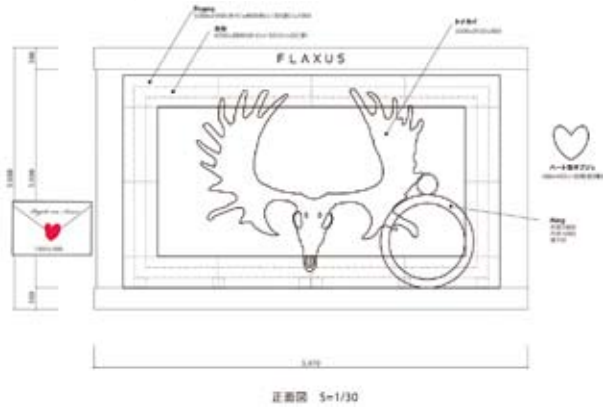

図07　ウィンドーディスプレイ施工図正面図

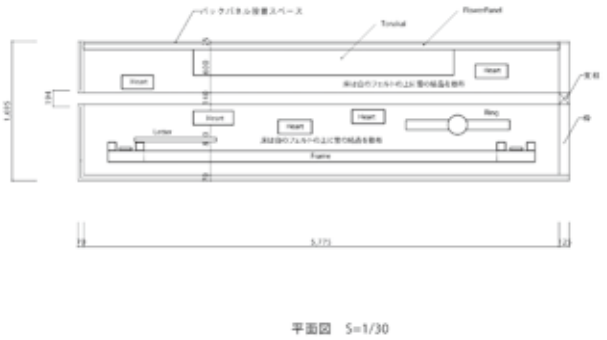

図08　施工図上面図

８. 額縁制作

制作に関しては、三六判の板材から必要な大きさのパーツを切り出す作業を行った。これに関して、技術教育講座の木工室に新設された精度の高い丸鋸が有効化された。額縁に関しては、板材の大きさから割り出した寸法の板材をベースにして、レリーフ部分の表現を 30㎜厚の発泡材のパネルを型紙に合わせて切断し、カッターナイフでレリーフの表情を大胆に付けて行った。当初は、カッターナイフで形を作った後にサンドペーパーで丁寧に表情を作ったが、逆にインパクトが弱くなり、切りっぱなしで大胆に荒削りで表現した方がより存在感がアップすると判断し、クリアなエッジの効いたカッター切断面を引き出す方向で処理した。特に、上下の帯状に表現するレリーフに関しては、50㎜巾に切断したものの中央部を発泡材専用の熱線カッターでイレギュラーに切り込みを入れながら変化を付けて切断して行った。また、大きなレリーフの凸部に球状の発泡スチロールを半裁し半球上のパーツをポイントとして利用した。

以下がパーツの下地と、完成した状態の額縁部である。

図09　額縁レリーフ部発泡材による下地

図10　完成した最終仕上げの状態

９. トナカイの制作

今回の制作で結果的には非常に制作困難なオブジェになったものである。大きさもさることながら、立体感を表現する為に板材を積層させてカッターナイフやサンドペーパーで表情を出して行くようにした。トナカイの角の持つ独特の質感もできる範囲で表現しなければならない。さらに、頭部に関しては、ラインストーンを用いて表面をすべて埋めて行くという根気のいる作業が必要になった。

最大サイズである三六判から最大サイズのパーツを切り出して２層にすることにした。角の左上部と下部、右上部と下部、頭部の５つのパーツを重ねるので、10個のパーツが必要となる。以下に示す図面がトナカイの制作に必要なパーツを原板から取り出す指示図であ

る。

図11　トナカイのパネル割り当て図

原板の発泡材から熱線カッターで輪郭に沿って切断した後、表情を出す為に作業用の太い刃巾のカッターナイフで荒削りし、角独特の凹凸やテクスチャーを基本的にはカッターナイフを使い分けてえぐり出すように切り込んで行った。その後、荒めのサンドペーパーで形をまとめて、細かいサンドペーパーで調整した。やはりこの作業では通常の発泡材ではイメージ通りの表現はできなかったと思われる。きめ細かい発泡のカネライトフォームｂⅢならではの造形性である。以下が下地の最終形である。

図12　トナカイの発泡材による下地

次に、アルミホイルを接着しなければならない。発泡材とホイルの相性を様々検討したが、住友スリーエムのスプレー糊 77 が速乾性があり接着力も申し分ない。発泡材専用のスチノリがあるが、大きな面積を塗る場合や速乾性を期待する場合には向いていない。発泡材で作成した下地にスプレー糊で均等に塗布し、ロール状のアルミホイルを切断しながら空きの面が出ないように注意して、テクスチャーを拾うように押さえつけながら接着して行った。以下がアルミホイルを接着した状態の頭部である。

図13　トナカイのアルミホイル接着後の状態

その後、表面に宝石のような輝きを演出する為にラインストーンを貼り付けて行った。ゴージャスなイメージと大人のクリスマス、バロック的な高級感溢れたクリスマスのイメージを創出する為にウィンドーの中央部で絵の中心に位置するトナカイの宝石のオブジェとして表現した。販売されているラインストーンのできるだけ大きな種類の円形や楕円、四角のものを使用して変化のある表情を作った。カラーを使用するよりもあくまでも質感を大切にして表現することによって、できるだけ高級感を感じてもらえるように考えた。以下がラインストーンを貼った状態のものである。

図14　トナカイ頭部のラインストーン装着状態

角の部分であるが、頭部と同様に発泡材で作成した下地部分にスプレー糊を塗布し、その上にアルミホイルをテクスチャーを失わないように適性に貼付けて行った。アルミホイルでカバーしているので有機溶剤を使用しているスプレーであっても融けることがないので、安心して使用することができた。ホイルをベースにしているので、できるだけ金属質のゴールドを表現したい為、通常のゴールドのスプレーではなく、メッキ調の特殊なものを使用することにした。このメッキ調のスプレーは、心配していたポスターカラー調のマット的な安っぽいゴールドではなくメッキを施したようなメタル調の輝きのある高級感ある仕上げに成功した。これも、下地をアルミホイルにすることによって、よりその効果が出たと思われる。さらに、角の部分にもジュエリー的なイメージを与える為にラインストーンの半球上の小粒のものでゴールドのメッキが施しているのがあったので、味付け的に全体に貼付けることにした。ちょっとした近くに行って確認しないと分からないものであるが、より角の輝きがランダムな光を反射するように効果があったように思える。以下が最終的なトナカイの表現になる。

図15　トナカイの完成状態

基本的には、横 3m 高さ 2.5m もある大型のトナカイの頭部を設置して数ヶ月の間その状態を維持させなければならない。当初は、背面にしっかりしたパネルを配置し、そのパネルに背面から支持材が出て宙に浮いたようにする考え方でいたが、背面のパネルを使用することが難しいことが分かり、自立するしかないということで、角部の両サイドと頭部の３つのスタンドを作成し、それにそれぞれのパーツを装着して表現するようにした。きめ細かい発泡材は、ビス止めにもある程度対応できるようであったので、何とか期間内に落下することはなかった。以下がトナカイの施工図である。

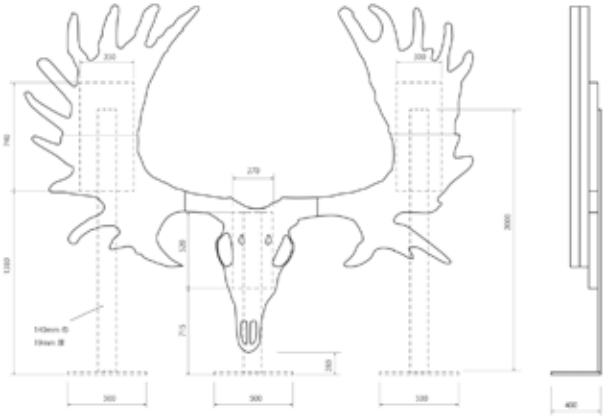

図16　トナカイの施工図

10. その他のオブジェ

最終デザインで示したように、額縁の中にメインのトナカイが中央に位置し、さらにコンセプトの「愛ある贈り物」を象徴するようにハートのオブジェを天吊りにて配置するように考えた。当初は、若干大きさが異なり形態的バランスも変化させたハート形を４つ制作することにした。以下の写真のように発泡材で縦に割ったように半分ずつの立体的なハート形を作成し、中央に吊り下げる鐺が通るように穴を空けるように考えた。半々のものをスチノリで接着し、その後全体的な形をカッターナイフとサンドペーパーで整え、仕上げて、その上に色ガラスのチップをはめ込んだもの、アルミホイルを巻いて長い木ネジを全体に突き刺したもの、テープを巻いて針金を張り巡らし、オーナメントをコラージュしたもの、カラーテープを貼った後にラインストーンを装着したもの４種を作成した。

図17　ハートオブジェの発泡材による下地

図18　ハートのオブジェの完成状態

次に生活文化大学で制作をお願いした指輪は、スタイロフォームを下地にしてリング部と宝石のパール部を作り、それぞれの質感に合う塗装をしてもらった。エンジェルは東北大学の美術部の学生に素材等を提供し、制作方法を指導して完成させた。背景のフラワーパネルは、宮城大学の学生が背面パネルにスタイロフォームを使用し、ブラウンの伸縮性のある布を貼り、その上に針金で茎の部分を表現した花を一輪ずつパネルに突き刺して表現した。以下が、その作業の様子である。

図19　背景のフラワーパネル制作状況

11. ウィンドーの完成

上記の過程を経て、無事に搬入、設置を行うことができた。設置した上で必要なオブジェと不必要なものを選別し、背景の表現も試行錯誤を経て、最終的には全面の花を配したものではなく、ハート形に花を配置する考え方になった。ライティングを調整し、額縁の位置や傾斜のさせ方、オブジェとの関係を総合的に判断しながら最終形へと進んだ。特に、今回のコンセプトを反映させるべく、封筒にクリスマスカードを挿入し「Regalo con Amore」と記したカードで中央のトナカイのオブジェのイメージ写真を配し、封の蝋にはレッドの蝋をハート形の型に流し込んで成型したものを貼付した。以下がクリスマスカードの完成形である。

図20

全体の完成したウィンドーは、以下のようになった。

図21　設置後のウィンドー完成状態

特徴的な、額縁のレリーフとトナカイの対比の写真。

図22　対比的な額縁とトナカイの象徴的な写真

12. まとめ

今回のウィンドーディスプレイに関しては、様々なハードルを越えなければならなかった。まず、「バロック」という与えられたテーマに則って独自のデザイン提案ができるか。それを具現化できるか。机上のデザイン案を提示するのはある意味で簡単である。それを

実際にそのウィンドーに展開できるかである。一つに、デザインのイメージに合う表現ができるかが問われる。質感があまりにも安っぽく図画工作的なものになってしまったら、バロックのゴージャスなイメージは感じられない。今回は特に巨大額縁の石膏風仕上げができるかどうかがポイントになった。白色のきめ細かい発泡材が予算内で購入することができ、納期も何とか間に合わせることができたこと。その白色の発泡材に石膏を混ぜた粒子の荒いタイプのジェッソを使用することができたこと。次に制作が可能な場所を得たことである。大型のパーツを時間を掛けて制作しなければならないのでそれを可能にしたのも本学の虎尾教授の協力があったからである。また、それを形にする為には、仮設とは言え、長期間において破損せずにその形を維持しなければならない。構造的にしっかりしたものを制作する為にも特に額縁とトナカイの支持体を制作する上で技術教育講座の協力なくしては成功しなかったであろう。新規導入された最新鋭の丸鋸が功を奏した。額縁を３分割して現場で合体させる合理的な方法や接合方法に関しても技術教育講座の安孫子先生の助言が幸いしたと思える。さらに、最終仕上げができて現場に輸送することが次の難関であった。額縁とトナカイのパートは分割しているとは言えかなりのボリュームであるとともに、非常にデリケートな作りになっている。発泡材を主体にしたオブジェであるので簡単に接合部等が破損する可能性がある。それを慎重に毛布や緩衝材を物と物との間に挟んで擦れたり破損したりしないように対応し、２度に分けて運ぶことにした。大型のトラックが大学にあり、それを利用することができて現場に破損することなく届けることができた。サイズがより大きい場合には、不可能であったことを考えると輸送方法を最初に想定して、そのサイズを確認した上で制作に取りかからねばならないことも今回初めて分かった。このような産学連携事業で予算ぎりぎりで実施しているので重要なことだ。また、現地でのウィンドー内への設置が可能かどうかももちろん慎重に扱わなければならないことだ。実際、デザインに当たる前に、現地での搬入方法とサイズの限界と照明器具の位置などを確認した。このような周到な準備と予算内に合わせた表現が可能になるような研究が必要になる。また、本学の協力してくれた学生にも謝辞を示したい。

13. 参考文献

・ELLE DECORATION No.11
・ELLE DECOR FEBRUARY 1991
・ELLE DECORATION No.17 1992
・ELLE DECORATION No.23
・ELLE DECORATION No.2
・ELLE DECORATION No.15
・ELLE DECORATION No.5
・ELLE DECORATION No.9
・VOUGE DECORATION No.37 1992
・MARIE CLAIRE IDEES No.4 1992
・HOUSE BEAUTIFUL JANUARY 1992
・年鑑日本のディスプレイ・商環境デザイン 1993
・年鑑日本のディスプレイ・商環境デザイン 1994
・奈良原一高「ヴェニチアの光」
・佐戸川清「インテリアトレンドビジョン 2009」

（平成25年９月30日受理）